

*
一 荷堂半水『縁の糸恋の哥占』翻刻紹介*
平野多恵

はじめに

本稿は従来紹介されたことのない架蔵本『縁の糸恋の哥占』（一荷堂半水編著）を翻刻し、江戸末期の俗謡による占いを紹介するものである。本書『縁の糸恋の哥占』は、『国書総目録』に記載がなく、一荷堂半水の作としても知られていない。江戸末期の俗謡による占いの方法と内容が知られる点で、本書は江戸時代における占いと俗謡流行の具体相を窺い得る資料として貴重である。以下、【書誌】

【解説】【凡例】【翻刻】の順で内容を紹介したい。

【書誌】

袋綴一冊。縦一〇・九×横七・七^七。料紙は楮紙。共表紙。本紙十四丁。表紙および表紙見返「うた占の仕やう」、一・二丁の序文と「うたうらを見る圖」は色刷。外題「縁の糸恋の歌占」、編著者は、序文末尾の記名から「一荷堂半水」と知られる。

【解説】

本書『縁の糸恋の哥占』は一荷堂半水による俗謡による占い書である。表紙見返しに書かれた「うた占の仕やう」によれば、歌占の方法は次の通り。まず、歌の表題を記した短冊五十枚をよく混ぜて

元の通りに重ねる。次に、その中から任意の一枚を抜き出し、自分の引いた短冊の表題を本書と照らし合わせると縁談の吉凶が分かるのだという。

序文によれば、本書に用いられた歌の文句は、当時、婦女子のあいだで流行していた俗謡の歌詞の一部を占いに選び出したものという。五十枚の短冊に合わせて、本書には五十の歌が収められ、それぞれについて表題・歌詞・解説が記載されている。歌の文句は七音と五音で構成され、当時流行した「よしこの節」や「都々逸」に相当する「七・七・七・七・五」の他、「七・五」「七・七」「七・五・七」「七・五・七・五」など、様々な形式のものがある。

編著者の一荷堂半水は、江戸末期の流行歌を集録した『粹の懐』の他、大津絵節、よしこの節、都々逸といった俗謡の歌詞を集めた書を多く刊行し、世の好評を博していた（注二）。流行の俗謡に精通し、情歌の宗匠でもあった半水は（注二）、その歌詞を同じく当時流行していた占いに用いたのであろう。本書は、半水が情歌集を続々と刊行するようになった文久二（一八六二）年以後に書かれたと推測される。

一荷堂半水は、江戸末期から明治の初めにかけて活躍した浪華の戯作者である（注三）。本名は狭川峯二。文政十一（一八二八）年一月、大阪船場の糸物商の家に生まれた。幼少の頃から風雅を好み、

今橋の俳諧宗匠五木庵潮水に入門し、半水を号す。盛んであった家業が時代の変遷で没落したため、難波村鷗橋付近にわび住まいをしながら、戯作によって何とか生計を立てるようになったという。

半水には、浪華房奔恋々山人、逸佳堂淫人、房葦白水などの隠号がある。これらの名で『春情色之姿美』『淫書開交記』などのへ読和ものゝを書いた。半水の号では、『粹の懐』をはじめとするへ俗謡ものゝ他、『諺臍の宿替』などのへ滑稽ものゝ、『新作落噺』などのへ落語ものゝを書いている。文久二（一八六二）年頃には北新地に住み、『粹の懐』（十二冊）を続々と刊行した。戯作や情歌集の執筆によって、一時は門前に書肆が詰めかけるほどの売れっ子となったらしいが、あまりに流行り過ぎ、また遣り過ぎもあって不評を買ひ、仕舞には世間から忘れられたという。

晩年は佃村（伝法村）役場の書記となり、明治十五年十一月四日に五十四歳で没した。

注

- 一 魔山人「一荷堂半水のこと」（『江戸紫』一六号、昭和四十七年三月）。
- 二 長谷川小信「一荷堂半水に就て」（『浮世繪志』第二五号、昭和六年二月）。
- 三 以下、一荷堂半水の生涯については、注一・二の論文に基づいて紹介する。半水の著作の複製・影印・翻刻・注解などに、一荷堂半水作・歌川芳梅画『諺臍の宿替』（武藤禎夫校訂・解説、大平書屋、平成四年三月）、玩宮隠士校注・飯尾東川遺稿・恋云々山人校合・婦多川好員画・元治元年板『男女

狂訓華のあり香 一名千開万交（太平書屋、平成八年九月）、『淫書開交記』（複製本、太平書屋）がある。

【凡例】

- 一、翻刻にあたっては底本の用字に従った。
- 一、本文の行取りとルビは底本に従った。
- 一、表紙以外に丁数を付し、丁の終わりに丁番号と表裏を（一丁表）（一丁裏）のように付した。外題、表紙なども（ ）に入れて示した。
- 一、歌占の表題に〔1〕〔50〕の番号を便宜的に付した。

【翻刻】

縁の糸恋の哥占（表紙外題）

うた占の仕やう

まづたんざく五十まいをよくくまぜかへして
 又もとのとふりにかさね、扱うらなはんとおもふ
 にほかにそのうちをいまぬかしみるべし
 其哥の表だいにて此本と引合すれば
 縁だんの吉凶をしろとこ、ろふべし（表表紙見返し）

それ歌占にて万事の吉凶を知ると
 いへるは往昔より今に傳へてやまと
 歌のたへなることいまさらいふも愚かなり
 さればこ、に当時婦女子の専らに

ひきうとふ端うたに哥の文句を撰み
縁のいと恋の哥占と題していさゝかの（二丁表）

うたうらを見る圖（一丁裏・二丁表）

女堂のたわむれになすといへどもみな
それくゝに作人のこゝろをつくして
つくりおかれし哥なれば真をこらして
占ふ時は其色情によらずとも迷ひを
解るの一助ともならん歟

一荷堂半水誌（二丁裏）

〔1〕松のふたば
妹背かわらぬちぎりとは

此哥は夫婦むつまじく万事おもひごと
かなわずといふことなく第一のよき縁なり

〔2〕なの葉

おもひまはせばもつたいのふてこと
ばさげたらおもふこと

此哥は目うへの人にほれられる性なり
ずいぶんうぬほれをつゝしむべし（三丁表）

〔3〕まさ月

たつたひとことのちにゑといふ
てわかるゝよいゑびす

此哥はしばらくわかるゝことあれども
いづれはそいとげるめでたきゑんなり

〔4〕すり鉢

こゝろごゝろにあわぬ日もあふ日
もよるはひとりねの

此哥はたがひにしんせつはあれどもとかく
おもふ事ならずしてとけかぬ縁なり（三丁裏）

〔5〕御所車

あけてうれしきけそふぶみ
ひらくはつねもはづかしく

此哥はなにごとによらずむねにこらへず
うちあけていふべしおもひ事かなふなり

〔6〕ゆき

こひしきひとはつみふかくおも
わぬひとのかなしさに

此哥はたがひにふかき縁なれども始終
にさわることありて少々くぜつあるべし（四丁表）

〔7〕ゆかりの月

ひろいせかいにすみながらせまふ
たのしむまことゝまこと

此哥はたがひあきもあかれもせねども
せけんはれてはそれれぬ縁としるべし

〔8〕閨の扇

あわぬつらさにこがるゝよりも
あふてわかるゝことこそつらや

此哥はおもひごとかなへばほかにくろうな
ことができてとかくゑんのうすき性なり（四丁裏）

〔9〕袖そでがうる

きつくおしめどそのかいもな

きたまごろもほんにまあ

此哥はなに事によらずとかくあきらめねば
ならぬ性なりいつまでもしたへばわるし

〔10〕かわず

きやつをまんまとたばかりし

くちはてふほうなるものと

此哥はもんくのとふりにてしちううわきの
性なりかならずゆだんすべからず調伏てふかくしらるべし (五丁表)

〔11〕さらし

せゝのあじろぎさへられてなが

る、みづをせきとめよ

此哥はかくしている事もうきなにたちととか
くままならぬ事を、ししかしすへはよき事有

〔12〕ざん月げつ

いまはつてだにおぼるよのつき

ひばかりはめぐりきて

此哥はさきのこゝろをたよりにするときはいつしかに
とけるといふ事なし。またゆるしさへもらへばはれてそふ有

(五丁裏)

〔13〕きれづくし

ふたりしづかにしのぶよはわか

れをさそふかりがねの

此哥はうれしき事あればいつしかかなしき

事のできてとかくくろうのたへざることあり

〔14〕さごろも

ひとりおもひをまくらにかたり

せめてたのみのゆめなりと

此哥はこちらにはしんじつまことをつくせども
さきすこしたよりなくおもわれることあり (六丁表)

〔15〕雲くもにかけはし

およびないとてほれよまいものか

此哥はとかくもの事つゝしむ性なれどもうち
あけていふてみるべしよろずかのふなるべし

〔16〕扇あふぎづくし

くぜつあふぎのきれはせん

此哥はめでたきうたなれども此もんくあれば
よき中もわかる、事ありつゝしみて大事にすべし (六丁裏)

〔17〕木きづ川がは

ふるはなみだかあきさめか

しかとはならぬ

此哥はとかくおもわくのかわる性なれば

さきにもうたかひのありてとげかぬるゑんなり

〔18〕浦うら嶋しま

はなのいろかについうつりぎな

此哥はだれかれなしにあだばれする性なり

ひとりを大事にすればかわる事なくすへよろし (七丁表)

〔19〕かなわ

いまさらさこそくやしからめ

さてこりよおもひしれ

此哥はまことに性わるにていかほとにうれ

しき事いわる、ともうかつにのるべからず

〔20〕虫のね

ほんにうきよがま、ならばなに
をおもわんよしなしごとを

此哥はなに事も氣のよわき性なれども

すへぐにはよきえんのあることなり (七丁裏)

〔21〕朝とで

すいたいてふをとりあけがみの
いへばこ、ろも

此哥はちよつとしんせつなよふでもとかく

うはきのこ、ろある性なりつ、しむべし

〔22〕かよふかみ

しりめづかいをよそにしまかせぬ

しゆびをわけあるやふに

此哥はいかほどしんじつにおもふてもさきへとゞかず

りんきなどにてくぜつことあり (八丁表)

〔23〕合の山

もというはきであいそめがはのふ

とうなるほどあわれはせいで

此哥はあだばれのやうでものちくはそいとげる

事もあれどとかくちわごとくぜつあり

〔24〕道成寺

つれないはたゞうかくとどうで

もおとこはあくしよな

此哥はうわきのうちにしんじつありてすへはとげ

る縁なりおなごはしんせつなともいへばすいふんよし (八丁裏)

〔25〕鶴のこへ

かわいとはうそかまことかその
ことのは

此哥はすこしうたがふこ、ろあれどもい

づれよろしきえんなればすへたのしみているべし

〔26〕袖の露

おとづれをきくやとまち

てわびしさの

此哥はきうにおもひ事かなわずなに事も

じつところへねばならぬ性なり (九丁表)

〔27〕ひなぶり

たかひもひくいもいろのみち

此哥はなに事もおしつよくいふてみる

べしおもひごとかのふ性なり

〔28〕あづまじ、

おもひおもふてちよまでもな

さげにかざすきぬくの

此哥はめうへのひとになかうどしられ

てうれしき縁をむすぶべし (九丁裏)

〔29〕新あしかり

われはこいにはまよはねどこい

といふしにまよふゆへ

此哥はすこしまけおしみつよき性なるゆへ

おもひ事かなはず何ごとも人にまかすべし

〔30〕やなぎく

ひましにほれてついでちになる

此哥はおもふ事かなへどもすこしくぜつすることありしかししぢう
はよき縁なり（十丁表）

〔31〕くろかみ

愚知なおなごの心としらで

此哥はこゝろにおもふほどのじつはさきに

おもはねどすへはうちとけてそふ縁なり

〔32〕萬ざい

まちくゝのこむすめやおとしの

よつたるうばたちまで

此哥おとこの見るときはやすしいろ事よりで

さずおなごのみるときはおもふ人にうわきを、し（十丁裏）

〔33〕夕ぞら

ままならぬこそまゝならぬ

此哥はしぢうはわるき事なけれども

おもひごとたへずしてしんきな性なり

〔34〕石橋

こゝろづくしのこのとしつきを

いつかおもひのはるゝやら

此哥はよろずの事にあんじる性なれども

すへはかたひゑんをむすびうれしき事有（十一丁表）

〔35〕菊の露

ひるはながめてくらしもなろが

よなくゝごとにおくつゆの

此哥はすこしいんきな性にていつもやつれ

ているなれどもそのすがたにほれられる事有

〔36〕玉川

さどにつき日をおくるまにいつ

しかあきにあふみなる

此哥はみのつめなどするうちはかなら

すいる事などすへからずすへとげぬとしるべし（十一丁裏）

〔37〕四季

みじかきよりをくよゝとなき

あかしたるほととぎす

此哥はもんくのとふりにてやくそくなどの

あるばんはあわれぬ事ありてくろう性なり

〔38〕おとしぶみ

まくらのやまのまよいみち

きくたびゝにめづらしく

此哥はとかくものごとにあく性なれば

おとこの事をみるときはゆだんすべからず（十二丁表）

〔39〕よどのかはせ

めぐるまごとにみんな

みなれぎを

此哥はたれにてもすかれる性にてずいぶん

おもひ事もかのふなりうわきをつゝしむべし

〔40〕きぎす

しらずしられぬなかなれば

うかれまいものさりとては

此哥ははじめよりおもひそめたひとにさへ

まことをつくせばいつまでもそいとげるなり（十二丁裏）

〔41〕 ぬちごじ、

あぶらうるしとまじわりて
すへまつやまのしらぬのは

此哥はとげるともとげぬともすこしわから
ざれともすへはかたひやくそくもあるべし

〔42〕 洩くみ

おびもとかゝでそれなかに

此哥はいづれはおもひ事のかのふ性なれども
すこしいんらんのすじあればつゝしむべし (十三丁表)

〔43〕 ほうらい

まわりかけたるさかきげん

うそじやないかや

此哥はうれしき事はあれどもことにより

てはあとでくやむことありよくくかんごうべし

〔44〕 きせん

うちのおか、がりんきのつのもじ

うしもよだれをながるゝかわせ

此哥はよそのいろごとのせわなどしてのち

はふらないりんきに人にわらはるゝことあり (十三丁裏)

〔45〕 狂らん

よるべやいづくしらいとのみだ

れてものやおもはする

此哥はなに事もきにかゝる事ありてくろう

なれどもつゝしむときはよろこびあるなり

〔46〕 こすのと

じつとてにてをなんにもいわず

此哥はたとへうれしき事あるとも人にけなり

がらすはわるべしひとりこゝろにたのむべし (十四丁表)

〔47〕 かんたん

ぬいぐわにもぬよふにもげ

にこのうへやあるべき

此哥はよろずおもひ事かなひてくろうの

なき性なりなにごともふそくいふべからず

〔48〕 よざくら

とほげさんすなめふきやなぎの

かぜにもまれてゐるわいな

此哥はきりやうかほどかゞ人にすぐれたると

ころのある性なりしかしうぬぼれにはじかくことあり (十四丁裏)

〔49〕 十日戒

はぜぶくろにとりばちせに

がます

此哥はかねづくのいろ事なればといふよくの

ふかい性なればうかつにかゝられぬなり

〔50〕 八千代じし

いつまでもかわらぬみよに

あいたけの

此哥は第一のよきうらないにておもふ人にかわい

がられあくといふことなくまことにうれしき性なり (裏表紙見返し)

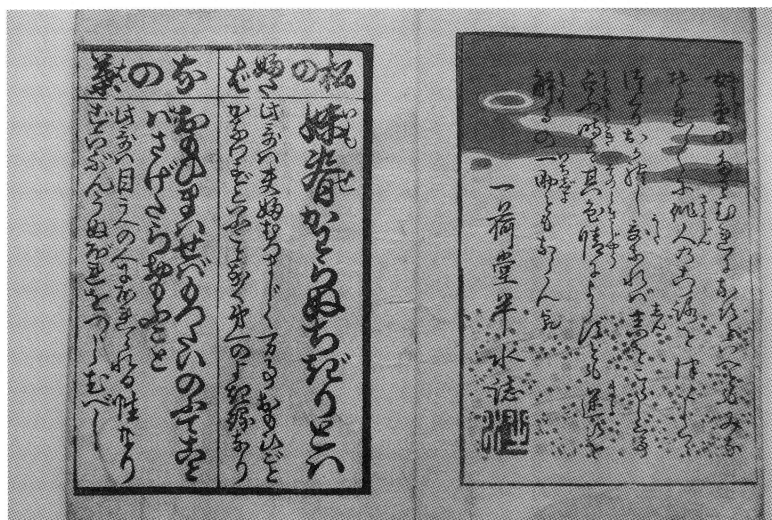
〔付記〕 本稿を成すにあたっては、中野沙恵先生と東聖子先生に種々ご教示を賜った。

この場を借りて深謝申し上げます。

● 図版1 「うたうらを見る圖」 (二丁裏・二丁表)



● 図版2 (二丁裏・三丁表)



Transcription and Introduction of Ikkadō Hansui's "En no ito Koi no Uaura"
 *Tae Hirano (Japanese Language and Literature)
 キーワード 歌占 俗謡 一荷堂半水 恋占 江戸末期